

彦 虎 宮 田
衛 善 田 堀

田 宮 虎 彦
堀 田 善 衛

新潮社版



日本文学全集 46

田 宮 虎 彦
堀 田 善 衛

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

田宮虎彦

落城

異母兄弟

足摺岬

絵本

菊坂

鷺

幼女の声

朝鮮ダリヤ

五

三七

五

八

二三

二五

一五

一八

銀 心 中

小さな赤い花

堀田 善衛

広場の孤独

灯台へ

曇り日

河

注 解
年 譜
解 說

佐々木基一

三五

三七

二六

三九

四三

四一

五七

五九

五四

田
宮
虎
彦

落城

慶応四年十月十六日、仙台にあった奥羽追討の西国勢主力について北上の動きがみえた。前日幕府方軍艦捜査を名として石巻より北上した土佐、肥後、津和野三藩連合二枝隊七百の兵と呼応するように、この日辰の刻薩摩安芸二藩連合三百五十、薩摩佐土原二藩連合五百六十の二枝隊が仙台を突いたのである。

黒菅藩首席藩老山中陸奥は、その報せを黒菅城本丸西溜りの藩老番所で聞いたが、聞きおわると一瞬老いた頬に淋しい自嘲のような笑いをうかべた。いよいよという諦めが陸奥の心にかげおちたからであつた。すでに会津も落ち庄内も破れていた。閏四月十九日、奥羽鎮撫参謀長州藩士世良修藏を福島に斬つて、白石城に結盟した奥羽越列藩同盟三十一の諸藩は、十月九日の盛岡藩降伏を最後として、黒菅一藩をのぞき

ことごとく薩長官賊の軍門に降つてしまつていた。破竹の勢いとはこのことだが、その敵勢を迎えて、徳川譜代最後の血戦をいどうとしている黒菅二万三千石の戦いが、蟬螂の斧のはかないあがきにすぎないことは、陸奥の胸にも火をみる程にあきらかなことであつた。陸奥の皺よつた頬から一瞬の笑いが消え去つてゆくと、やがて老いた濁つた眼に深い悲しみに似た淀みが沈んで来た。

黒菅城内は長槍や鐵を研ぐ砥の音が、火薬を練りあわす硫黄くさい匂いにまみれてゐた。その音を耳に追いつながら、陸奥は昨夜死んだ山中左膳、鈴木鼎、堀江真琴らのことを思い浮かべていた。昨夜まで陸奥はひそかに恭順のことを考えつづけていたのである。すでにおそいことであつたにしても藩主を救ふことの出来るのは薩賊への恭順の外はなくなつてゐた。城内に満ち満ちた官賊への罵声の中で、八十三歳の老いた陸奥をかこんで藩老山中左膳、江戸在勤藩老鈴木鼎、御旗奉行堀江真琴、御勘定奉行勝田三右衛門の四人が、滅び去つた徳川幕府にあくまで殉じようとする藩主和泉守山中重治の意をひるがえそうと心を砕いていたので

あった。だが、それもすべて昨夜までのことであつた。

石巻にあつた土佐、肥後、津和野の藩兵七百が、三春藩の兵を先導に北上川沿いに柳津に向つたという報告がついたのは、昨夜酉の下刻のことであつたが、その直後の戌の刻には、山中左膳、鈴木鼎、堀江真琴の三人が、御近習頭鈴木主税、劍術御指南役山崎剛太郎以下に斬られていた。陸奥、三右衛門の二人は城中西溜りにいたためわずかに難を免れたが、陸奥のいだいていた恭順のことはその時破れ去つたのであつた。陸奥とても戦いたかつた。薩賊の意を迎える恭順などという卑屈は陸奥もとりにくいたのであつた。だが、武士の名をはずかしめ、徳川恩顧にあるまじい恭順をあえてせねばならぬ窮地に追いこめられていたと陸奥は信じていた。藩主重治の生命さえ助けられれば——それが陸奥の恭順についての最後の願ひであつたわけである。だが、すべては終つたのだ。

十七日、古川、小牛田に進んでいた先鋒の二枝隊を追つて、奥羽追討総督九条道孝以下五千有余の西国勢が、寅の下刻仙台を發つた。九条総督の本営は申の刻

三本木にいたつたという。

この日まで、やがては西国勢に黒菅の城がかこまれ、ととしても、陸奥はまだ一脈の明るみを心の底に残していた。それは黒菅のごとき辺陲の小藩に、西国諸藩の兵が主力をあげて攻め寄せることなどあり得まい、というはかない望みであつた。せいぜい二三千の弱兵が仙人沼、赤石の街道口をおびやかすにすぎないだろう。とすれば、黒菅藩が城をあげて戦えば、三旬四旬の間はこれを支えることが出来る筈だ。たとい西国勢が元込銃ライフル砲の備えをほこっているとしても、土民をも加えているという烏合の敵勢に一矢をむくいることも難くないであろうし、十一月半ばまでこれを支えることが出来るとすれば、北国の黒菅盆地は深い雪におおわれてしまうのである。寒冷になれぬ西国勢が攻めあぐむことは必定であつた。恭順の機会もまたおのずからつかみ得よう。陸奥はそう考えていた。だが、そうした陸奥の期待はすべて裏切られて、雲霞の大勢が旗鼓堂々と黒菅に迫つて来るのである。火縄銃二百六十挺、旧式百发大筒二門、足輕以下には十分な刀槍もない黒菅藩が、果して幾日を支えることが出来

ようか。陸奥はもう淋しい笑いすら頬にうかべる事が出来なかつた。城内ではそんな陸奥の心をよそに、藩士たちが本丸広間にひしめきあつて火のように軍議を闘わしあつていた。

十五日の夜半から降りはじめた雪は、霰まじりとなつて十六日夕刻には降りやんだが、重い雪雲が盆地を垂れこめ、薄氷のはりつめた刈田の上を、時おり刺すような北風が吹きすさんですぎた。黒菅城は背に雪笹山を負つていた。屏風岩が屹立していて、しかも山背には瘴氣のゆらいでいる沼沢がつづき、けものさえ通らぬ峻しい山だが、その雪笹山から盆地をかこんで、東に赤石峠、南に折れて鷲合、天人の二つの山、西にのびて、鳩の巢、横笛、鬼場の三つの峰が起伏して猿啼山につらなり、その山裾に雪笹川が激湍をほとばしらせている。対岸は鉢甲の山塊となり、鉢甲の丘陵から雪笹山の西につづく仙人沼峠となるのだが、盆地を囲繞するこうした山々にもやがては淡い雪が薄化粧をこらしはじめる頃になつていた。

十八日、石巻から北上川ぞいに北上した土肥の藩兵は米谷から海ぞいに出て、気仙沼から飯森峠を越し、

奥州街道の薩芸連合の枝隊は一閃に進んで、狐禅寺の黒菅藩飛地を襲つていた。そうした敵勢が数日の後には、赤石峠から鷲合、天人、さらに猿啼、鉢甲の山々をへて、仙人沼峠にいたる三日月形に黒菅の城に迫つて来ることは明らかなことであつた。そうした山々の攻め口の中でも、仙人沼、赤石の二つの街道攻めと鉢甲の山攻めとは、西国勢主力が殺到して来ることであろう。そして、また、鷲合、天人の山合いの間道、雪笹川の激湍にそつた溪谷、さらに今一つ鬼場山のはげしい曲折の山径を辿るこうした峻しい山攻めも、会津を攻めた西国勢の攻め手として覚悟せねばならぬところであつた。

この日申の刻にはそうした敵勢への備えもきまつた。軍議は鉢甲山に黒菅藩の主力を備えることになつた。鉢をふせたような山塊がつらなりあつてはいる鉢甲山は、十数里の山裾をひいて奥州街道の厩沢尻の町までのびている。多勢をたのんで攻めよせる西国勢が、仙人沼、赤石の峠攻めより鉢甲の山攻めをえらぶことは必定と思へた。黒菅藩では鉢甲山にすでに六カ所の砦をきずいてある。その六カ所の砦にはさらに土囊を

きずき壕を掘った。首将には藩老山中重徳、参謀には鈴木主税、山崎剛太郎の二人が選ばれ、ほか二百三十七人、いわば藩の精鋭をすぐつてこの鉢甲の固めにあたるわけである。大筒一門と鉄砲百五十挺がこの備えに配置された。仙人沼峠の固めには御勘定奉行勝田三右衛門を首将に、参謀横沢祐之進以下百三十三名があつた。大筒一門鉄砲七十挺が配置された。鉢甲山についての藩の主力である。

赤石峠には御物頭今泉史信、御徒頭服部英秋以下百十五名、鉄砲五十挺。鷺合、天人の間道には御目付吉井賢之助以下七十五名、鉄砲二十五挺。鬼場山には御用人鯉沢三郎以下四十名、鉄砲十挺。雪笹川沿い猿啼山間道には御物頭鶴見正人以下八十名、鉄砲二十挺。城内には山中陸奥以下僅か三十八名の手兵が残るわけであつた。

鹿柴、逆茂木、陥窪、黒菅にある限りの備えは出来上つた。今は十数里の彼方に迫つた敵を待つばかりである。出来秋の新米はことごとく城内の兵糧庫に収め、土民はすべてすでに熊坂、白木、五十沢、倉谷の山間の部落に避難させてあつた。

陸奥は小姓の長十郎をつれて天守に上つた。野の涯まで静まりきっている。殺氣だつた鹿柴などが遠い山峡にまで伏せられているなどとは、到底思えない死んだような静けさであつた。陸奥の心の静けさもやはりそのように死人の静けさに似ていた。二三日の寒さがなごんで、弱い冬のひざしがもれていた。風もないで、その日溜りに陸奥はかすかな安らぎを感じた。すると、ふいに、奥羽同盟が結ばれて再び召し出された三月前からの出来ごとが、走馬灯のように陸奥の心によみがえつて来た。白河口がやぶれて、奥羽同盟勢に援軍として出ていた藩の御長柄奉行山中重次郎ほか四十三名が斬死した報せがついた時も、陸奥はまだ戦いがこのようにおしつめられようなどとは思つてもみなかったのだ。夏が急ぎ足に去つて、今厳しい殺氣をひそめている四辺の山々が真赤に紅葉を散らした頃も、なお陸奥は負け戦さを信じなかった。今も城内では慶応という旧い年号を用いている。しかし、仙人沼峠を越せば、もはやそんな年号は消え失せてしまつていた。すでに明治という年号にかわり、江戸も東京とかわつていた。

十九日、奥州街道ぞいの薩芸の先登隊は、すでに水沢の町をすぎ厩沢尻にむかつていた。二番枝隊も狐禰寺にはいつて、長坂、摺沢から高田街道をうかがっているという。飯森峠を越した土肥の兵は赤石の南五大里の鰭浦についていたし、おくれて仙台をたつた総督九条道孝以下の主力も十二枝隊に編成され、三段構えの布陣を示しながら奥羽街道を一関に向っていた。枝隊ごとに錦の旗が風になびき、鼓笛のひびきが会津に攻めいつた時と同じように澄んだ冬の空にひびいていた。そうした敵勢の噂が伝わるごとに城内には藩士たちのどよめきがまきおこるのだった。西国勢を罵る声にまじって、土肥津三藩の兵を先導して赤石に攻めすすんで来るといふ三春勢へのはげしい憎しみの声が、土囊を城壁にきずいたり、火縄銃の錆を研いだりしている藩士たちの口々に罵りかわされた。一人も生かしてかえさぬ、たとい西国兵に己れの生命を絶たれようとも、その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせるといふあうのだが、それは白河口で寝返りをうつた三春兵のために背後をつかれて、ことごとく無残な斬死をした山中重次郎以下四十三名を悼む声であつ

た。夜にいつて冷たい北の風がまたしきりに吹きすさびはじめた。

二十日、城内では巳の下刻から無礼講の酒宴がひらかれていた。藩士たちは、まず藩の鎮守黒菅神社並びに黒菅弁天の前に武運の加護を祈り、ついで藩主重治直々の盃をうけた。藩主の眼にも藩士たちの眼にも涙が光っていた。四十五歳の重治の白い豊かな頬にはかすかに青黒い影が落ちていた。藩士たちは席次に従つて盃をうけてゆくのだったが、近習藤田源之介が重治の前に進み出た時、藤田は盃をさし出してゐる重治の手にとりすがつてむせび上げた。

この藤田源之介は筈がたくみであつた。重治は源之介のその筈を好んで、軽格の同心からぬきんで御近習番二百俵にとりたてたのである。その恩義を思う心がまだ二十三歳の源之介の心に制しきれなかつたのであろう。慟哭が源之介の咽喉をつき、涙が頬に流れた。順次を待つ藩士が溜りにとどこおつた時、重治はその源之介の肩に手をおくと、

「源之介よ、なくな、手柄を待つてゐるぞ」といつた。鷲合、天人の間道に源之介の部署は定め

られていた。

藩士への賜盃は未の刻に終った。短い冬の日差しが黒菅の坂をとりまく冬枯れの山肌に淡い残映をそめていた。御庭方の小者が城内の鬘の間を箒ではいている。箒の目のあとが扇形にうつくしく形づいているのだが、こんなことが今は何になろうか。だが、小者は三十年以前に仰せつけをうけたまま、今日も昨日に同じように城内をはききよめている。明日も同じように掃いていることであろう。明後日も、そして、その次の日も。しかし、それ以後の日はもはやわからぬ別の運命にさらされているのだった。この年老いた小者も勤め終って番小舎に帰ってくれば、竹槍に種油を焼きつけているのだった。その竹槍で幾人の敵をつくことが出来ようか。

広間からは酒に酔った藩士たちの黒菅節がきこえて来ていたが、やがて、それらの藩士たちも武家屋敷にさがっていった。これが最後の下城であり、明朝払曉の登城にはすでに腹当脛楯に身をかためた身体なのだ。帰ってゆくわが家では妻子が威儀を正して待っていることであろう。最後の別れのために、藩庁からは

人数ずつの鰯の干物と一瓢の清酒がさげわたされていた。

陸奥も熊坂村の別荘から老妻のいく子をよびよせてあった。四囲の守りのどの一角がくずれても、武家屋敷の妻子たちはすべて黒菅城にたてこもることになっていた。その報せは太鼓櫓の乱打で知らされることになつてゐる。陸奥は長十郎をつれて、このたびのお召しで登城してからはじめての家路をたどった。せきとめられた濠の水は清冽な雪笹山の流れ清水を満々とたたえていた。厚い氷のように冷たくすきとおつてゐるその濠の底には鰹が一尾泳いでいた。今日の酒宴に濠の魚は一尾残らず網ですくい上げられた筈であつたのに、その鰹はそんな周囲の悲劇もしらぬ氣に静かに尾鰭をうごかしていた。陸奥はしばらく足をとめてじつとその鰹をみつめた。運の好い奴め、そう心につぶやいてみたが、ふと心につまずくものがあつた。奴は運がいいのであろうか。黒菅藩士一人として生き残るものがない筈である。果して一人も生き残るものがないだろうか。刺すような痛みが陸奥の心をついた。

陸奥はふりかえつて、

「長十郎よ」

と呼んだ。長十郎はふいに老人のしわがれた弱い声をきいて面をあげた。うつむいて歩いていたからである。長十郎は陸奥がこのように弱い声を持っていたことを知らぬ。他人の声をきいたように己れの耳をうたがったのであった。長十郎が面をあげたのをみると、陸奥はふっと頬をやわらげ、

「長十郎、あと幾日の生命かしれぬ、暇乞いするところもあるう」

といった。長十郎の頬にみるみる紅がさし、やがてそれが青白くひいていったのをみて、陸奥はまた静かに歩みをつづけた。

座敷のうちには香がたきこめてあった。陸奥が江戸詰の頃、会津侯から賜わった松風という銘のある伽羅であった。母屋では孫の刀根が妻子と別れの宴を張っている。陸奥は子供運がわるかった。長男は夭折し、残った次男は病身であった。その次男にも二十七年前に先だたれていた。刀根はその一人子である。刀根もまた病身であった。表向きのお役にもたないのだが、明朝の出陣にはやはり加わるのである。勝田三右

衛門について仙人沼峠に出陣するのだが、敵と数合の剣すらあわし得ないであろう。それを思うと、刀根の武運の拙さに陸奥は思わず臉がしめつた。やがて刀根の弱々しい謡がきこえて来た。陸奥は立ち上ると庭下駄をはいた。いく子にはついて来いよ、と声をかけて、姫松の茂みの中を母屋への石畳をふんだ。高台にある陸奥の屋敷からは藩士たちの家々がみえた。かすかに燭台の灯がゆらいでいる。暮れやすい宵闇がもう濃くたれこめていた。母屋に上ると陸奥は声をかけた。

「刀根、儼の仕舞の見じまいをするか」

陸奥の老いた身体に型がきまつた。

二十一日、西国勢の先陣はすでに鷹巻、赤石にいたって陣をしいていた。後続の枝隊も、一関、水沢、厩沢尻の町々で間道に入り、盛街道を人首、姥石に進んでいた。鎮撫総督九条道孝の錦旗は厩沢尻の町にひるがえっているという。黒菅藩士もその日定め部署についた。夕刻、仙人沼峠の物見の藩兵に、峠下の種市の村から炊き出しの煙が立ちのぼっているのが見えた。敵勢であった。十五日、石巻にあった土肥津三藩

の兵が動きはじめて七日目、鎮撫総督九条道孝が奥州街道に錦旗をひるがえして僅か五日目のことであつた。

種市の村里から、馬の嘶いなききが仙人沼峠にきこえて来る。遠眼鏡にダンブクロ姿の西国兵がみえた。だが、その日も次の日も種市の西国勢は動こうとしなかった。あるいは鉢甲、赤石その他の攻め口の敵の陣營のとのうのを待っているのだろうか。黒菅の城内では、琴の音がきこえていた。奥の女たちがひいている曲である。さすがに笑い声はきこえなかったが、血を洗う戦いが十数里の近さに迫っていると思えぬ和やかさが、冷たく冴えた冬空に流れていた。陸奥は時おり長十郎をつれて城壁の武者窓に出てみた。櫓窓からのぞくと、濠端の柳の根方で武家屋敷の十歳足らずの子供たちが六七人、割腹の真似ごとをしていた。いずれはその父母たちから教えられたものであろうが、作法になつた身のくばり方であつた。脇差に白い晒布しほふをまき、左から右にかけて手をひくと、介錯かいさく人が木刀もくとうをその後頸にうち下すのだった。そうかと思うと、稚いもの同士がお互いに相手の襟もとに手をかけあつて、

左の胸もとに脇差をつきさすしぐさをする。呼びかわす澄みきつたかん高い声が、眼の下の濠端から陸奥の耳をついた。

二十二日、未ひつしの刻を小半時もすぎた頃、赤石峠下の落葉松かたちうのはずれに西国勢の斥候がみえた。物見の番小舎に気づいてすぐ退いたようであつた。同じ時刻に鷲合、天人の間道に鹿柴うさひをふみこえて来る獺師風体のものがいた。吉井賢之助が徒士ちゆうしを走らせてといいたですと、五十沢村の吉兵衛という猪撃ちに名うてのものであつた。吉兵衛は賢之助の前にひかれて来ると、

「実は母親が癪うさをやんで、麓の稻荷様の御符をいただいて来るようにと申しましたので」

と答えた。五十沢村に立てこもらせている村役人に騎馬を走らせると、村役人もそれに相違ないと答えた。賢之助は、母親を大事にせよといつて吉兵衛を帰したが、吉兵衛が帰って一刻ばかりたつた後、西国兵らしい斥候が五名山肌の視野をよぎって走つた。

敵は四辺に近づいていた。それはもはや動かせぬ事実であつた。その夜半、雪笹山の背に薄墨をながしたように雨雲が走つたと思うと、バラバラと檐えんをたたく

霰あられの音がきこえはじめた。やがて風も加わって、雨戸をはげしくうちつける雨風の音が夜明け方までつづいた。

翌朝のことである。仙人沼峠の勝田三右衛門から、薩軍の使者が山中和泉への鎮撫総督の親書をもつて来ている、御処置の手配を願いたいという早駆けが、前夜の雨にくろくぬれた峠道をかけて来た。陸奥はすぐ通すように下知すると、自分は袴かちもをつけた。未の刻、仙人沼峠守備の藩兵にまもられて、狩衣かりぎぬをつけた侍従万里小路実房と名乗る正使と、緋ひの色の陣羽織にダンブクロの薩藩士福永太兵衛と名乗る副使が黒菅城の大手橋をわたった。万里小路は錦の小切れを襟にさしていた。

鎮撫総督の山中和泉守重治にあてた親書は丁重ていじゆうをきわめたもので、今や蝦夷地えぞちをのぞき六十余州ごとく王威に服せぬはない。山中和泉一死をもつて徳川家三百年の恩義にむくいんとしていることは、幕府の親藩すらすでに王師に従ったのに比して、まこと神武以来綿々たるわが武士道の精華ともいふべきである。しかしながら宇内うないの情勢を判断するに、もはや黒菅一藩

が王師に敵対しようがどうしようが大海中の一粟粒のごとき小事にすぎぬ。山中和泉並びにその家中の徳川家への忠誠は神もみそなわし、おそらくは駿府宝台院に謹慎中の徳川慶喜もよしとせられるであろう。これ以上戦いを交えることは一天万乗の君の望みたまわぬところである云々と、長い奉書の巻紙に達筆にしているであつた。

陸奥は軍使を迎賓館げいひんかんに招じいれて酒肴しゅぎょうを供した上、物見に命じて二連の打揚げをあげさせた。二連の打揚げは、仙人沼峠以下各要衝の首將の集合を命じるものである。勝田三右衛門、山中重徳、今泉史信、鰐沢三郎、吉井賢之助、鶴見正人の六人は夜に入って大手門を入った。親書に対する最後の評定のためである。百目蠟燭ろうそくが四本西溜りの間にともしかれた。評定は、山中左膳や鈴木鼎の生きていた日の評定のように、深夜に及んだ。雪笹山の山風にまぎれて箏曲そうきょくみだれの聞えて来るのは、迎賓館の軍使の焦慮を和ますため奥女中浅川がひいていたのであつた。浅川は奥羽にきこえた琴の名手である。さすがに哀愁がこめられて鬼気をさそうものがあつた。評定が三更さんせいに及んだ時、陸奥が口

をきった。

「ともあれ、親書によれば重治侯御一身は御安泰の由、山中国家万歳のことは知らぬとしても、これが殿をお救い申し上げる最後の機会であるとすれば、私は恭順を誓おうと思う」

声はなかった。寒々とした山肌の風に、首將たちの腹当のうちはうすら寒いのである。言葉はないが吐息のようなどよめきが音もなく一座をながれた。

「御意見がないとみえる。では、万事陸奥の老いたこの顔にお任せをいただきたい」

陸奥はふるえる声でそういった。

翌未明、万里小路実房、福永太兵衛の二人は陸奥におくられて大手門を出た。冷たく澄みきった空にひとひらの白い綿雲がうかんでいた。遠ざかって行く二人の軍使が町並の石屋根の間に消えるまで、陸奥は二人を見送っていた。

騎馬の二人に、低い石屋根の町並がゆれてみえた。死んだような静けさであった。荷物でも運びだしたあとなのか、明け放ったままの戸口から土足にみだれた家の中がみえた。秋田犬が二人の馬に吠えかかって、

しばらく追いつがって来た。しつこい東北人の気質をこの犬ももっているものとみえる。町並がきれたところへ街道にそって櫓木立ちがあり、そのかげに広い琵琶形の池がある。隠密を使つて作らせた地図に弁天池とあった池である。よほど水が岸辺に薄氷をたたえていた。街道はかすかな勾配で次第に仙人沼峠にかかつて行つた。いつか黒々した刈田の盆地がはるか眼の下にあった。

二人はそこで騎馬の足をとどめ、黒菅城をふりかへつた。朝日の中に美しい天守閣が甍を光らせながらそばえたつてゐる。二万三千石にはすぎた天守である。ふと二人は昨夜折衝を重ねた黒菅の藩老、山中陸奥の敏深い老いた顔を思い出した。白髪をまじえた長寿眉のかげに、泣いているような眼が淀んでいた。あの家老もあるいは黒菅にはすぎたものであるかもしれぬ。昨日のように前後は警固の騎馬がかためてゐる。その騎馬のものたちもやはり駒をとめて黒菅の城をふりかへつてゐた。二人はまたゆるやかな駒の歩を進めはじめた。やや峻しい勾配にかかるところで道は大きく右折した。すでに山肌であつた。次第に道は上り坂とな